

天草本「伊曾保物語」の 文末部における諸相

——助動詞・助詞を中心に——

佐々木 峻

天草本伊曾保物語は、室町末期の口語を知らる上で非常に重要な資料である。その時代口語をうつす伊曾保物語の文末部に現われたることをとばしてみると、地の文と会話の文では、大きな相違があることがわかる。それを表にまとめてみると別表の通りである。

ここでわかるように、助詞が二五八例、助動詞が五五八例と最も多く用いられている。それも、過去の助動詞「た(だ)」を別とすればこれら助動詞・助詞は会話文において集中的にあらわれている。助詞・助動詞に限らず、語の種類としてみても会話文の方が地の文に比べてずっと変化に富んでいて多形である。これらの現象は一体何を意味するのか。すなわち、国語変化の先導をつとめるものが話しことばであり、なかならず文末部であると考えられる。

書きことばとしての文語に対して、純粹の

口語を用いて書かれたと考えられる伊曾保物語の、話しことば的性格、話しことばといつても、文章に書かれた以上、そこには純粹の話しことばとはいささか趣きを異にすることはいなめないが、伊曾保物語の会話文というものが、かなり話しことばに近いものであつたらうことは、考えられる。

さて、別表に示すごとく、助動詞としては、「た(だ)」「ちゃ」が最も多く、それに次いで、「うず」「うずる」「ない」「まじい」「ぬ」が多く、助詞では、「ぞ」「か」「な」などである。

室町末期における語法上の特色の一つは、中古語から近世語への変遷の過程にあつて、音韻上の変化、それも、簡略化、という方向に沿つて、現代語の原形をなす種々相が見られる点にある。それがこの伊曾保物語においても認められるのであつて、例えば、助動詞

「たり」の「り」が脱落して、現代においても過去の助動詞として用いられている「た」、「である」から「であ」を経て、指定の助動詞「ちゃ」となったもの、推量の助動詞「むず」が「ん」を経て「う」に変わったものなど、簡略化、融合の様子が分かるのである。また、活用においても上、下二段活用の一段化、終止形と連体形の混同もこの頃から生じてくること、こういった現象が伊曾保の文末部においても容易に知られるのである。

終止形と連体形の混同については、打消の助動詞「ぬ」がその一例であつて、本来なら終止形が「ず」であるべきであるのに、係助詞の制約がない場合でも(それがほとんどであるが)文末において連体形の「ぬ」で終止していること、むろん、「ず」で終わる例も皆無ではないが、頻度からいって、「ぬ」の比ではない。こうなつてくると、もはや、「ぬ」を連体形とは見なし得なくなつてくる。一方、この「ぬ」「ず」にもまして、打消には「ない」が用いられる傾向が大きくなつてくるのである。推量の助動詞「うずる」は、本来的に終止形である「うず」とほぼ同数現出する。ここでも、終止形・連体形の混同を示している。一般的に、この期において、連体形の終止形移行への過渡期であることを実証するものといえよう。この現象は、助動詞のみならず、動詞、補助動詞、形容詞など、

活用語一般に見られる傾向であった。

また、従来の係助詞に対する呼称も、終止形と連体形との活用形の混同から、その法則が、次第に乱れはじめてくるが、「こそ」においてはまだかなりその法則が守られていたようである。国語科学講座第八巻「近古の国語」の中で、土井忠生先生も触れておられるが、伊曾保においても同じ現象がみられる。係助詞の「ぞ」の働きの衰え、むしろ終助詞として、疑問・強意・反語など、複雑な意味を示しはじめるのに対して、「こそ」はもっぱら係助詞としての働き、それに応ずる語が、「なれ」「たれ」といったいわゆる文語臭の強いものと結びついていることからみても、比較的安定した性格であったように推測される。

ともかく、この期のことばには、文語的用法も併存しているのであるが、すでにそれは衰微を示し、これらに代わる新しいことば変化の方向が強く打ち出されている。この変化が最も強く現われてくるところが、話しことばの性格の強い会話文においてであり、更に、その文末部においてである。

書きことばは、話しことばに比べて、やや固定的である。特に近世以前においてはそうであったと思われる。もちろん、書きことばも時代と共に変化して行くものであることは当然ながら、話しことばに比べて、やや遅れ

がちであり、また、その変化は話しことば中心にすすめられたことであろう。公式の、また正調の文として用いられた文語体の書きことばに比べて、話しことばの自由さというものは、話し手の意志に、半ばまかされきっているともいえる。こうした話しことばの特性が、国語変遷の背後にあつて、大きな役割を果していると考えられる。ことに、助詞・助動詞においてはそれがいえる。助詞は、字数が少ない関係上、形の上の変化は乏しいけれども、意味内容が変化し、複雑化して行く。助動詞・動詞などでは、その逆に、意味内容の変化よりもむしろ形の上での変化が起り易かつたと思われる。動詞・形容詞の音便化、敬讓の用言、「おぢやる」が「御出ある」から、「ござる」が「御座ある」から、「おりやる」が「御入ある」から、「まらす」が「参らす」から等々の変化(簡略化)においてもそれがいえる。

先述の如く、伊曾保の会話文が、室町末期の口頭語に、より近接しているものと考えるならば、別表に示した如き、会話文における、ことばの多彩性を示す事実と、それが内包する意味内容の複雑さを見ることによつて、会話文の文末部のもつ、国語史上の意義を論ずることは、あながち早計とはいえない。たしかに、会話文の文末部には、その意味内容において、地の文の単調さに比べ、複

雑なニュアンスが結集されているようである。たとえば、終助詞「ぞ」について、ポドリゲス日本大文典(土井忠生博士訳)では「これは他の感動詞、例えば『さて』などが先行し、又ある場合にはそれがなくて、常に文末におかれるものである。色々な意味と力を持っていることは、例によって知りうるであろう。」同「ある疑問名詞が先行する場合にこの『ぞ』が疑問の助辞であること」の(傍点は筆者)これは伊曾保では次のように現われている。

○かの乗馬がこれを見て、「汝なぜ我を礼拝せぬぞ？」(疑問)

○「あれほど賤しう拙い身で、何としてこの返答に及ばうぞ」(反語)

○「仰せのごとく御身の舌の先は添けれど、眼は抜いて取りたいぞ」(強意)

また、「か」について、同口氏大文典で、「『か』は疑問の助辞である。従つて不確実で疑はしい事に就いて話すのには、『か』を用いる」と述べている。伊曾保の文末部では、次の三種類に分けることができる。

○「ここ許に雁や、鴨は無いか？ 買はうぞ」(疑問)

○「いづれの人の頭か我らが踏み物にならぬが有るか」と自慢すれば……(反語)

○女房このことを聞いて、力を落して、「まだあれは酒のことを忘れぬか？」(慨嘆)

「ヤ」については、同じく口氏大文典中に「文末の『ヤ』」として、「この『ヤ』は『かな(哉)』の漢字をもって書き、色々な感情を表わす」とある。伊曾保の用例では、

○ 「やあしたりや」と嘲って行った。(強意)

○ 「あら最愛の者や」 氣遣ひするな」(感動)

○ あら疎ましやノ 長生きして辛勞を為うよりも、今死んだはましであらう(慨嘆)

助動詞においては、まず「チャ」については同じく口氏大文典で、「主として話しことばでは、『ことチャ』書きことばでは『ものなり』『ことなり』『儀なり』という」とあるが、別表における数字から見てもそのことがはっきりわかるのである。

他の語についても同様、その内包する意味内容は複雑で、用いられ方も様々であった。

以上伊曾保物語においてみられること、文末部の語における意味内容の複雑化という点からみて注目すべきこと、形態的にも、音韻的にも、多くの問題をはらんでいること、それが地の文に比べて、会話の文の方が圧倒的であることなどの事実から、話しことばの、国語変化に果た役割というものを考察し、そこに注目することによって、室町末期のことは把握の一視点としたかったのである。

天草本伊曾保物語 文末部用語集計表 (昭和35年12月18日)

品詞	意味	表現形式		地の文		会話の文		下心
		語種	構成	偶話	伝	偶話	伝	偶話
助動詞	過去	た	た	97	66	18	24	0
			だ	13	4	0	0	0
	断定	ちゃ	ぢゃ	2	1	47	36	47
			てあ	0	0	0	0	1
		なり	なり	0	0	0	1	0
			なれ	0	0	2	1	0
	打消	ず	ず	0	0	0	3	0
			ぬ	0	0	12	6	4
		じ	じ	0	0	1	0	0
			じまじい	0	0	14	9	1
	まい	まい	0	0	5	2	4	
		ない	0	0	16	14	6	
完了	たり	なれ	0	0	3	2	0	
		つ	0	0	1	0	0	
推量	うず	うず	0	0	14	20	8	
		うずる	0	0	18	20	0	
		うずれ	0	0	0	2	0	
		う	0	0	1	9	2	
尊敬	る	る	0	0	1	2	0	
		るる	0	0	3	5	1	
		れい	0	0	0	1	0	

る。もちろん、伊曾保物語のみの、それも、文末部という限定されたわくの中で、わく外をも含めての全体にまで論を及ぼすことは無暴であるが、その一考察としては許されると

思う。春日政治博士のいわゆる「国語史上の一劃期」として、今後一層開拓されるべき分野であらう。

(本学学生三年)

賦 詞	ぞ	られい	1	0	56	55	4
	と	ゞ	14	0	5	5	0
	よ	ゞ	0	0	4	1	0
	な	ゞ	0	0	11	10	0
	か	ゞ	0	0	14	15	1
	かし	ゞ	0	0	7	2	0
	は	ゞ	0	0	2	2	0
	かな	ゞ	0	0	11	6	0
	に	ゞ	0	0	3	2	0
	を	ゞ	0	0	6	2	0
	から	ゞ	0	0	0	1	0
	も	ゞ	0	0	2	0	0
	そ	ゞ	0	0	1	1	1
	ば	ゞ	0	0	2	0	7
	ばや	ゞ	0	0	1	0	0
	や	ゞ	0	0	3	0	0
こそ	ゞ	0	0	0	1	0	
敬 讓 語	ござる	ござる	0	0	3	15	0
		ござれ	0	0	1	1	0
	ござなり	ござない	0	0	1	6	0
	おぢやる	おぢやる	1	2	0	0	0
	おりある	おりあれ	0	0	1	0	0
		おりやれ	0	0	1	0	0
	おりない	おりない	0	0	2	0	0
	あい	あれ	0	0	1	1	0
		やれ	0	0	3	0	0
	まらす	まらせる	0	0	1	0	0
		まらする	0	0	0	1	0
	申す	申す	0	7	1	0	0
	奉る	奉る	0	0	0	1	0
	聞こし召す	聞こし召せ	0	0	1	0	0
仕る	仕る	0	0	0	2	0	
存ず	存ずる	0	0	3	0	0	
動詞		終止形	8	1	18	5	2
		命令形	0	0	22	47	3
形容詞		終止形	0	0	4	1	4
			/	/	/	/	/
その他			0	0	0	11	1
			/	/	/	/	/

○ ※ 注 表中の「偶話」はテキストでは「イソボが作り物語の抜き書き」、「伝」は「イソボが生湊の物語略」となっている。
 テキスト、日本古典全書「吉利支丹文学集 下」 イソボのハブラスク 新村出・柘源一校注